

# 南方（仏印）

## 第五師団の仏印進駐

島根県 井上光雄

### 仏印進駐

われわれ第五師団は、大東亜戦開始より一年半程前、昭和十五年七月に仏印側に対する、外交上の加圧、牽制、援蔣ルートの遮断の目的をもって廣西省南寧から西に四〇〇〜五〇〇キロ離れた竜州、憑祥地区に酷暑の中を移駐し、仏印に対する侵攻作戦の準備を進めたのであった。

廣西省地域の風景は、南面に描かれた風景と全く同じで、あるいは坦々たる平原の真ん中に入道雲のよう

な岩山が立ちふさいだり、あるいは畳々たる山脈の中に荒々しい岩肌をさらした絶壁となり、別世界のような風景を綴りあわせた風景である。

憑祥の町はいわゆる「瘴癘」の地で、日中四〇度を超える暑さの上に湿度が高く、マラリヤ、疥癬等の発生に部隊は悩まされ続けた。特にマラリヤは「熱帯熱」と称する悪性で、四〇度を超す高熱が隔日でなく毎日続くので、体力を極限に消耗し、死に至る恐ろしい病気であった。

これがため部隊命令で、夕方六時になると蚊の駆除のため憑祥駐留部隊が一斉に「蚊いぶし」を行った。街路樹のユーカリの葉をいぶすのだ。そのために街全体が猛烈な燻煙に覆われなかなかの壮観であった。

## 住民の生活

廣西省は李宗仁、白崇禧の統率する「廣西モンロー」主義と称する排他思想の省で、中国の中でも独自の存在の省であった。省民の抗日意識は徹底し、省民は全學生が「廣西學生軍」を組織し、精強を誇り、女子學生は「廣西學生娘子軍」を組織して銃を取って前線に現れた。省民は日本軍が進出した地区は住民は復帰しても家業に復することなく、日本軍と住民との接触は一切断たれていた。

そのため軍としては現地調弁ができず、蔬菜等の現地自給は断たれ、東京灣の欽県に陸揚げした主食の米は自動車輸送で五〇〇〜六〇〇キロの輸送補給によるほかなく、主食以外の補給は断たれ、粉味噌、粉醬油で味付けした中味の毎日であった。

この補給路も日本軍南寧侵攻時、住民と軍によって徹底的に破壊され、一〇〇メートルごとに對戦車壕が掘られズタズタの状況であったのを、我軍の必至の復旧で貨物自動車の運行ができる程度に復元した補給路であった（当時の軍用トラックは四トン積）。八月到

着した初年兵（昭和十四年徵集現役兵）は輸送能力不足のため上陸地点欽県から憑祥まで六〇〇キロ以上を徒歩行軍で追及してきた。ほとんど全員が背中全部をタムシにやられ、目も当てられない姿で連隊に到着した。

## 憑祥の町

廣西省の全域が未開な地の果てのような風物であったが、この憑祥の町は民家でも英字の古新聞や書籍が目に入ったり、仏印の駐留邦人から慰問品として外国タバコやパイナップルが届けられたり、なんとなく文化の匂いが肌で感じることができる。侵攻の相手は手ごわいフランス軍の心配はあるが、文化都市であろう、国境の向う側のドンタン、ランソンを早くこの目で見たい欲望に強くかられる。

家屋の建築様式は町部は中南部同様黒い煉瓦造り、屋根は薄い黒い瓦葺きであるが、一步街を出ると竹林か芭蕉の林の中に四〜五軒宛群がって民家がある。竹の柱、竹の屋根、竹の梁、桁、竹の床板、竹の壁、一切合財竹でできている。大きさは畳三〜四枚ぐら

の小さいものである。極端に貧しいけれど、風雅な涼しい住居である。街の外れに大きな岩山があり、その岩山の裾に奥行き五〇メートルぐらいの洞窟があり、中に街の人の所有であろう住宅が十軒程軒を並べて建てられている。避暑が目的の住居であろう。私達も毛布を持って午睡に出かけることもあった。

### 訓練

師団は従来中国軍と異なった近代装備を持つ仏印軍との交戦を予期して戦闘訓練を重ねた。防毒マスクまで携帯した完全装備の訓練である。新しい敵との戦闘に対する一種の不安と、一面未開の廣西省から、文化の地仏印に対する憧れが心中錯綜する複雑な心境であった。

この憑祥で連隊の幹部候補生の集合教育が行われた。連隊の二百六十人の有資格者の中から選抜された二十二人の候補生である。この教育の結果、甲幹と乙幹に区別淘汰されるので、皆が一生懸命頑張った。機関銃は三人であり、助教として軍曹殿が一人専任された。演習には助教も手伝って機関銃を持ち出して搬送に当

たった。

何分にも猛暑の中の訓練であるので、午睡の時間が二時間程度設定されていたが、午睡の前に宿舍内の蠅を各人一〇〇匹宛退治した者が午睡に移れるという教育隊内規定があるので、昼食が終わると炊事場の附近で蠅との格闘が始まる。

一打十匹も打ち殺すこともあったが、取っても取っても無尽蔵の蠅の大群との格闘が続いた。ある日、中隊の将校の指導の下、砲台山の攻撃訓練が行われた。

この砲台は阿片戦争当時の中国側の砲台山で、標高四〇〇〜五〇〇メートルぐらいはあった。

私は銃手として参加、中隊の兵一人の幹候生である以上、絶対に他に負けられない立場にあり、三〇キロもある銃身を担いで、絶えず先頭にたつて登攀とうはんを続けた。胸をつく急坂、樹木に銃がひっかかる。汗が目に入って視界を遮る。銃の重みで山肌を這いながらの前進である。言語に絶した苦闘の末、やっと山頂に達した時は全く生死の境に達していた。

この山頂で見て驚いたのは、赤錆びた巨大な砲台砲

の姿であった。砲身の長さ一〇メートル、口径二〇、二五センチの大口徑砲であった。阿片戦争が単に廣東地区だけでなく、仏印国境のこの辺境まで防備に翻弄された当時の中国の姿を如実に表しているのがあった。

私はこの激しい演習のため発熱し、診断の結果黄疸、入室治療を命ぜられた。入室とて病室があるわけではなく、大隊医務室の附近の空家を探して浮浪者のように飯盒一つで自炊生活である。幸いに同じ入室患者である又賀候補生と二人であったのは心強かった。黄疸治療の必要な生鮮野菜等は何一つないので、芋の茎や親芋をゆがいて食べて治療に専心する日が十日ほど続いたが、突然進攻命令が下り、教育隊は解散、中隊に復帰し中隊指揮班要員として作戦に参加することとなった。この憑祥で石井部隊の給水班が配属され、素焼き土管でろ過したきれいな水を制限なしで供給してくれたのは全くありがたかった。

## 進 攻

九月二十二日夜半の弦月が、国境に近い路傍で、行軍・縦隊で装具を背に負うたままの姿で仮眠している

兵を皎々と照らしていた。

突如、四囲を裂くような銃砲声に夢を破られた。これで進攻と定まったのであり、こうなればと一瞬覚悟を決めた。「前進！」部隊は静かに立ち上がって月の光の中を右も左も奇岩屹立する山峡の道を縫う如く、熾烈な銃砲声を左方に聞きながら、敵の国境の要塞「ドンダン」の退路遮断へと進路を取った。

山間を抜け、やや広く開けた畑で黎明を迎え、大隊が集結した途端「ドカン」と炸裂音。一同地上に伏すも次の着弾がこない。後で判明したことであるが、頭上の岩山の上に敵の国境分哨があり、頭上から手榴弾を束ねて投げたものらしかった。

夜が明ければ空からは飛行機、地上からは戦車と、今までの中国軍と異なり相手がフランス軍だ。「徹底した偽装せよ」と命令が飛ぶ。人の偽装が終わって、これからは馬の偽装にかかろうとした時、「東の方向敵機だ！」対空監視哨の絶叫。見上げると複葉のプロペラの敵二機、部隊上空に近接中。

爆弾投下か地上掃射かと身を固くして見上げている

と「上を見るな！ 顔が白いから敵機に発見される！」と指揮官が怒鳴る。四囲を見わたすと、朝糞の最中でズボンをおろしたまま、飛行機を仰ぎながらぐるぐる回っている兵もいた。これが私たちの敵機に対する初体験であった。

#### 「ドンダン」兵営払暁攻撃

「ドンダン」兵営は、正面侵入路にはレールを切断して埋め込んだ軌条塞が設けられ、戦車の突入が完全に防げ、兵舎の壁は厚さ一メートルのベトンで固められ、銃眼が穿かれ、要点にトーチカが設けられ側射が準備され、兵舎外に散兵壕が掘られ、さらに外側の丘の斜面には鉄骨の柱に鉄条網が数線に張り巡らされている、堅固を誇ったものであった。

攻撃部隊は、先刻国境の敵の監視哨で激しい銃砲声が聞こえて国境線を突破した第三大隊が、引き続き敵の兵営の正面攻撃に当たった。敵のトーチカの火力のため一時突撃頓座するも連隊砲、速射砲が敵前六〇メートルの至近距離に陣地侵入を敢行し、猛射を浴びせ、攻撃中隊の突撃を支援した偉功で、頑強に抵抗を

示した敵もついに白旗を掲げ降伏を示したのであった。側面攻撃の任務のわれわれの大隊も続いて兵営に突入したが、散兵壕内は血潮に赤く彩られた夥しい葉莢の山、壕の底には血がたまって、先刻までの激戦を示している。兵舎内で付近に居住していた敵の妻女が夫の屍にすがって泣き伏している姿は哀れであった。この攻撃で部隊も葛尾中将以下二千数人の貴い犠牲を払ったのであった。

幹候教育隊も先日まで起居を共にしていた小川候補生をこの戦闘で失った。進級の中で整れた友を思うと胸が潰れる思いでいっぱいである。兵舎を離れて川原で集結する途中で同郷の加藤上等兵と出会った。彼は国境線突破で激戦を交えた機関銃中隊である。銃を分解して三脚の部分の担いで「井上恐かったぞ」と私に呟いて去って行った。あの人にとっては全く本音であらう。

#### ランソン攻撃

部隊は攻撃後隊形を整え仏印軍の北部防衛の本拠ランソンの攻略へと移った。わが第二大隊はまたしても

後方迂回遮断の任務を負うて、間道をかき分けての行軍に移った。途中かなり大きな河に出会う。河幅は七〇〜八〇メートル、急流で、川底は礫で、水深は腹部ぐらい、装具も衣服も脱いで頭上にあげての徒歩に移る。ともすれば急流にのみ込まれそうであるのを一生懸命耐えて一歩ずつ足元を固めて前に進む。前を渡っていた山根古兵がアッと思う間に転倒、少し流された体は立ち上がったが、頭上にあげた装具も衣服も何もかも失っていた。皆自分を支えることがやつとでどうしてやることもできない。川を渡った後、山根一等兵は禪の上に雨合羽を被い防暑帽をかぶって行軍に加わっている姿は哀れであり滑稽であった。

その夜、分隊で語り合つて、各人が分担して山根の装具、衣服一切を調達することに決まつて、夜間を利用して他部隊にも潜り込んで、明朝は光輝くような山根一等兵ができていた。

黄痘で入室加療中この作戦に加わつた私は、猛暑の毎日の行軍は全く応えた。特に食事に注意を払つて朝早く起きて樹上のパイアの青い実を落とし、皮を剥

いて薄く切つて塩をふりかけ、飯盒の中蓋に入れた。背負つて歩く間に、頃合な漬物ができる。そうしてピタミンの補給に心を配つた。幸いに中隊の衛生兵は同じ町内出身の川上等兵であった。宿営の夜ごと貴重なピタミン剤の注射を施してくれたのは助かった。極度の緊張の中での闘病は、作戦の終わるころは全く治癒していた。

われわれ大隊の迂回作戦で敵の退路封鎖が功を奏した結果、作戦開始より旬日、敵がランソン中央に屹立する岩山の上に白旗を掲げたために、和平進駐へと急転換に移行した。

降伏したフランス軍将校が敵の司令部隊の広場の芝生の上に三々五々に集まつて、自由にくつろいでいる光景も奇異なものであった。彼らの言語は双方共に一言も通じない。私達の中隊長が召集前女学校の教員でフランス語ができたので、師団の唯一人の通訳として活躍しておられた。

師団はフランス軍側に対し、軍の軍紀厳正を誇示する必要の一端として、従来中国に起居していた時の野

糞の弊が嚴禁され、便所の設置が下命せられ、これに  
応じて中隊で作られた便所たるや三十メートルほどの  
細長い一列の縦穴であった。間仕切も囲いもない。朝  
になると前の者のお尻を拝しながらの用便であった。  
前者の便を見て健康状態を談じながらの御用の一刻で  
ある。

街路は道幅も広く、車道の両側の歩道との間に大き  
な街路樹が植えられ、両側の店舗も美しく、全く今ま  
での中国側と比較できない街の風景である。別世界に  
迷い込んだ感慨であった。

連隊は停戦協定成立後、ランソンから引き返し、ド  
ンダン、ナーチャム、チャートケーの国境の要所に分  
駐することとなり、首都ハノイへの進駐の夢は断たれ  
た。私達の大隊はドンダンから西に二〇キロぐらいの  
ナーチャムの旧仏印軍兵營に駐留することとなった。

この兵營は標高一〇〇メートルぐらいの山の上にあ  
り、市街地が一望に眺めることができた。堂々たる洋  
風建築の兵舎であったが、不便なことは駄馬編成の中  
隊にとっては馬の水飼いであった。毎飼付時には裸馬

に飛び乗って長い坂道を川まで下りて、水飼いに長い  
行列を作って登り下りを繰り返す日々であった。

この町で私は突然「井上候補生は連隊の次期甲種幹  
部候補生を引率し、熊本陸軍予備士官学校へ入校すべ  
し」との命令を受け一瞬唖然となった。何千里の海陸  
を隔てた北部仏印の地の果てから、自分一人でなく六  
〇〇七〇人の人員の候補生を引率するという全く雲を  
つかむような命令であった。

ドンダンの連隊本部に出頭し詳細な説明を受けた。  
ランソン―ハノイ―ハイフォンは陸路鉄道輸送、ハイ  
フォン―上海―宇品間は船舶輸送、要所要所に兵站基  
地があり兵站司令部が設置されて乗船、給与、検疫等  
一切行ってくれる軍の輸送の組織の説明を聞いて、やっ  
と胸を撫でおろした。候補生を二個小隊に編成し、私  
達同期の甲幹十二人が各々小隊長を担当し、内地帰  
還と将校への進級の二つの夢が同時に叶う嬉しい旅立  
ちであった。

## 【解説】

体験記執筆者・井上光雄氏が、昭和十五年七月に、仏印進攻作戦準備のため、中、仏印国境道の要衝「竜州、馮祥地区に移駐」とありますが、これをなさしめたのは「対南方戦争指導計画案」研究討議の結果の成案によるもので、内容は政治的、概念的な文書であったと『戦史叢書』にあるものの全文中、方針、要領の仏印に関するものを記述する。

### 世界情勢ノ推移ニ伴フ戦局処理要綱

昭和十五年七月三日

大本営 陸軍部

#### 方針

帝国ハ世界情勢ノ変局ニ対処シ速ニ支那事変ヲ解決スルト共ニ特ニ内外ノ情勢ヲ改善シ続イテ好機ヲ捕捉シ対南方問題ノ解決ニ努ム

支那事変ノ処理未タ終ラサル場合ニ於ケル対南方施策ハ内外諸般ノ情勢ヲ考慮シ之ヲ定ム

右両場合ニ応スル戦争準備ハ概ネ八月末日ヲ目標ト

シ之ヲ促進ス

#### 要領

一 支那事変処理ニ関シテハ特ニ第三国ノ援蔣行為ヲ絶滅スル等凡ユル手段ヲ尽シテ速ニ重慶政権ノ屈伏ヲ策ス

外交ニ関シテハ先ツ対独蘇施策ヲ重点トシ特ニ速ニ独伊トノ政治的結束ヲ強化シ対「ソ」国交ノ飛躍的調整ヲ図ル

米國ニ対シテハ世界情勢ノ推移ニ伴フ動向ニ留意シ我ヨリ求メテ摩擦ヲ多カラシムルハ之ヲ避クルモ帝國ノ必要トスル施策遂行ニ伴フ自然的悪化ハ敢テ之ヲ辞セサルモノトス

1 仏印（広州湾ヲ含ム）ニ対シテハ援蔣行為ヲ徹底的ニ遮断セシムルト共ニ速ニ我軍ノ補給担任、軍隊通過及飛行場使用等ヲ容認セシム 情況ニヨリ武力ヲ行使スルコトアリ

2 香港 3 蘭印 4 以下略

南支方面軍を大本営直轄に改組した。



參謀本部富永第一部長は七月十日「變転極まりない国際情勢に鑑み、政戦両略の機敏な協調一致、神速適切な兵力の運用を図るため」、大本営直轄としたが、そのねらいは、爾後の仏印、香港等に対する現地軍の指導を、政略との絡み合いから陸軍中央部が直接実施するにあつた。

すなわち、翌十一日、第二十二軍（南支方面軍）は、同日第五師団に対して師団全力を仏印国境に推進して、ハノイ進駐準備を命令していた。このため、支那派遣軍司令部は、突然降つて湧いた、軍の大本営直轄に憤激していた。

しかし、七月二十三日、大陸命第四三八号により「南支那方面軍ヲ支那派遣軍戦闘序列ヨリ除キ大本営直轄トス、隷屬転移ノ時機ハ七月二十五日零時トス」。そして同日、支那派遣軍総司令部と南支那方面軍司令部に対し基本任務が付与された（大陸命第四三九号）。これにより支那派遣軍は、南支那における任務が解除され、南支那方面の謀略については南支那方面軍司令部を区処する等となつた。

### 第五師団の仏印進駐

仏印への平和進駐をめざす日仏東京会議は難航のすえ八月三十日妥結し、現地協定も九月四日に成立した。その要点は、軍隊通過、飛行場三個の使用とその警備兵力五〇〇〇〜六〇〇〇の進駐内容とし、進駐日時や兵力駐屯位置細部などは引続き交渉することとなつていた。

翌五日第二十二軍は、国境待機中の第五師団に原駐地帰還を命ずる一方、大本営は進駐させる印度支那派遣軍（軍司令官、西村琢磨少将（二期）近衛歩兵第一旅団司令官（近衛歩兵第二連隊、第三師団野戦高射砲隊、兵站自動車第一八一中隊）の編組と平和進駐を命じた。しかし、翌六日、第五師団の森本大隊が国境をわからなかったことから越境事件を偶発、交渉は振り出しに戻つて、中央は改めて「九月二十二日零時以降自主的進駐を行う」方針を採択した。それは、交渉が成立した場合には西村兵団と第五師団が進駐する両建てながら、最も大事な両者を区別する具体的要領は欠如しているのである。

翌十四日富永第一部長は東條陸相から懇々と平和進駐の必要なゆえんを説明され現地に飛び立ったが、富永少将の指導は、平和進駐など不可能であるとの前提に立ったものであった。そして、進駐兵力を五倍の二万五千人、使用飛行場を三個から五個に拡大要求を示す一方、ハノイ総領事に居留民引揚げ準備を実行させた。これは六月以来国境に進出させてきた第五師団の仏印進駐をなんとか実現させようとの魂胆にもとづくものであった。

西原機関長はこの拡大要求をもち仏印側と交渉を再開、安藤第二軍司令官は交渉妥結から進駐開始まで二十四時間の余裕をとり、進駐日時を二十三日零時と発令したが、中央はその配慮をくみとらず、三国同盟に関する交渉上の配慮もあって、軍命令に追従し、交渉期間も同じ二十三日零時と訂正してしまった。

これにより、日本に対する「石油の全面禁輸」「屑鉄、鉄銅の対日全面禁輸のときがきている」などが米閣議で意見が一致したという。しかし、日本軍が仏印に実際に進入するまで推移を待つが最善と決定した。

この様な交渉難航の中、二十二日午後四時三十分成立、進駐に先立つこと七時間三十分前であった。南支方面軍はこれを午後六時頃承知した。速やかに第五師団の陸路進駐中止を命じなければならぬが、武力進駐を固執する中央の富永第一部長、幕僚たちはその処置をとろうとしない。それでも安藤軍司令官は、この反対をおして二十二日午後九時四十五分、停止命令を発した」が、その命令が第五師団に到着したのは二十三日午前零時四十分であったので、仏印軍との間では武力衝突が始まっており、戦闘は、二十五日午後一時二十五分のランソン攻略をもって終わったのである。

わが方、戦死七一、戦傷二三〇の犠牲を出し、仏印軍は二二二二人の捕虜を出した。

九月二十五日、富永第一部隊が帰任報告に沢田参謀次長の室に入るや、沢田次長は即刻富永第一部長の職務停止を命令した。

一方、武力衝突の結果、海路進駐する印度支那派遣軍（西村兵团）の進駐延期問題が起り、中央統帥部は二十五日午後七時に、翌二十六日十二時以降の友好

的進駐要領を指示（大陸指第七四五号）したが、二十五日午後十時頃受領した南支方面軍佐藤賢了参謀副長が電報をポケットにしまいこみ、護衛海軍の制止を押し切り、二十六日午前四時十分上陸を強行した。怒った海軍部隊は、陸戦協力を停止して沖合に去ってしまった。

また、二十六日朝、軽爆撃機がハイフォンを爆撃する事件が突発して海軍側は直ちに上奏した。このため陸軍省首脳は軍司令官即時更送、爆撃禁止の天命を発売した。この爆撃事件は指揮機の合図誤認したある一機の偶発事故であると判明したが、西原少将は「統帥乱れて信を内外に失ふ」と、六月以来の富永少将一派に対する憤激を発信してよこしたという。

事態の推移を見つめていた米国は、即座に介入措置をとった。即ち、二十五日中国に対する二五〇〇万ドルの追加借款の供与と、翌二十六日すべての鉄鋼類の輸出禁止を發表した。これは、確実に重慶政権を元氣付け、日本の国力達成を阻害する措置となった。

執筆者の所屬した第五師団は、九月二十六日以来ラ

ンソンに集結していたが、大本営は十月一日、南寧―龍州道に沿う地区からの撤退を、十二日、第二十二軍の戦闘序列から除き、大本営直轄として上海付近に転進して上陸作戦の訓練を実施すべきを命じられ、大東亜戦での敵前上陸師団として蘭印その他の作戦に参加するのである。

## 明号作戦

### 現役時代を回顧する

石川県 山下 芳雄

とかく軍隊というところは若者にとって人生の墓場であると言われがちであるが、大和魂を修練する道場でもあった。このことは大東亜戦争下の三年間、仏印派遣部隊の現役初年兵としての体験からでた率直な言葉である。

昭和十八年五月十八日、当時の仏領印度支那のサイゴンに上陸した。早速、薪を焚いて走る汽車で二日間